

## 漢文「重要助字」確認テスト（之・而・於・以・乎ほか） | 定期テスト対策 | 誰でも古典塾 解答・解説

---

問1 ここでの「而」は順接の置き字で、それ自体は読まず、前の語に送り仮名「て」を付けて「学びて」と読む。働き＝順接の接続で、「学ぶ」と「習ふ」をつなぎ、前の動作を受けて次の動作へつなぐ。（※「而」を接続詞として「しかうして」と読む用法もあるが、この文では置き字とするのがふつう。）

問2 「之」は前に出た「学んだ事柄（学んだ内容）」を指す。読みは「これ」。「時に之を習ふ」＝折にふれて復習する、の意。

問3 読み＝「ところ」。「所不欲」＝「(自分が) してほしくないこと・望まないこと」。「所+動詞」で「～するところ（こと・もの）」を表す。

問4 ウ 対象。「施於人」で「人に（対して）施す」と、動作の及ぶ相手（対象）を示す。場所でも比較でもない。なお「於」自体は置き字で読まない。

問5 一つ目「取之於藍」の「於」＝起点・出どころ（～より・～から）。「藍より取る」。二つ目「青於藍」の「於」＝比較（～より（も））。「藍より青い」。同じ「於」でも前後の語で意味が変わる典型例。

問6 逆接。「藍から取ったのに、（その元の）藍より青い」と、前後が逆の関係でつながる。ここの「而」は読まない置き字で、逆接（しかも・それでいて）を示す。

問7 読み＝「これ」。「之を藍より取る」。指示内容は「青（青色の染料）」。

問8 二か所とも読み＝「これ」。共通の指示内容は「道（学問・真理）」など、前提となる学ぶ対象。「之を知る者は之を好む者に如かず」。

問9 読み＝「もの」。働き＝「～する者・～な人」を表す（「仁者」＝仁の人、「知者」＝知恵のある人）。前の語を受けて「～する人」とまとめる用法。

問10 読み＝「なり」。働き＝断定。「是れ知るなり」＝「これが（本当の）知るということである」。文末で断定を表す。

問11 「矣」は読まない置き字。働き＝文末で断定・完了の語気を添える（強い言い切り）。「夕べに死すとも可なり」と読み、「矣」自体は訓読しない。

問12 読み＝「いづクンゾ」。働き＝反語を表す副詞（疑問詞）。「焉んぞ牛刀を用ゐん（や）」＝「どうして牛切り包丁を使う必要があるか、いや要らない」。意味＝「鶏をさばくのに、どうして（大きな）牛切り包丁を使うか（その必要はない）」。小さな事に大げさな手段は不要、の意。

問13 読み＝「もって」。意味＝「～でもって・～を用いて・～によって」。「五十歩を以て百歩を笑ふ」＝「五十歩逃げた者が百歩逃げた者を（自分の方がましだと）笑う」。手段・理由を表す。

問14 読み＝「と」。働き＝並列・相手を示す（～と（一緒に））。「吾汝と力を畢くす」＝「私はお前と力を尽くして」。ここでの「与」は「あづかる」「くみス」ではなく、「～と」の意。

問15 働き＝比較（～より（も））。「猛於虎」＝「虎よりも猛々しい・恐ろしい」。「苛政は虎よりも恐ろしい」の意。「於」は読まない置き字。

問16 ①の「而」＝順接（学んで、その上で習う）。⑤の「而」＝逆接（学んでも思考しなければ）。どちらも読まない置き字で前の語に送り仮名「て」が付くのは同じだが、①は順接、⑤は逆接で、文脈によって順接・逆接が決まる。「学びて思はざれば則ち罔し」。

問17 働き＝場所（～に・～で）。書き下しは「王、堂上に坐す」＝「王は堂の上に坐る」。③の起点・比較、⑬の比較とは異なり、ここは動作の行われる場所を示す。「於」は読まない置き字。

問18 書き下し文。

例文②＝「己の欲せざる所、人に施すこと勿かれ。」

例文④＝「之を知る者は之を好む者に如かず。」

問19 現代語訳。

例文⑤＝「学んでも（自分で）考えなければ、（知識が身につかず）ぼんやりとして得るものがない。」

例文⑧＝「朝に（正しい）道（真理）を聞くことができたなら、その日の夕方に死んでも悔いはない。」

問20 （記述例）「於」の用法を三つに分類すると、

- ・場所＝例文⑩「王坐於堂上」（堂の上に坐る。動作の行われる場所）。
- ・比較＝例文③「青於藍」または⑬「猛於虎」（～より（も）。性質の程度を比べる）。
- ・対象＝例文②「施於人」（人に対して施す。動作の及ぶ相手）。

いずれも「於」は読まない置き字だが、前後の語によって場所・比較・対象などの意味を補って訳す必要がある。

問21 （記述例）本問の例文に出てきた「之」は、①「時習之」、③「取之於藍」、④「知之者・好之者」のいずれも「これ」と読む指示代名詞で、前に出た事柄（学んだ内容・染料の青・学問の対象など）を指している。一方、「之」には本問には出ていないが「君子之道」のように「の」と読んで連体修飾を表す用法や、「之（ゆ）く」と読んで「行く」という動詞になる用法もある。このように「之」は同じ一字でありながら、文脈によって「これ（指示）」「の（連体）」「ゆく（動詞）」と読み・働きが変わる、典型的な多機能の字である。